



TITLE:

北魏の僧祇戸・佛圖戸

AUTHOR(S):

塚本, 善隆

CITATION:

塚本, 善隆. 北魏の僧祇戸・佛圖戸. 東洋史研究 1937, 2(3): 201-226

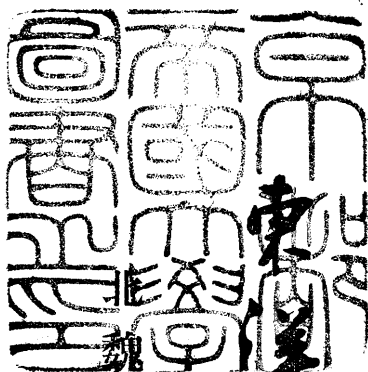
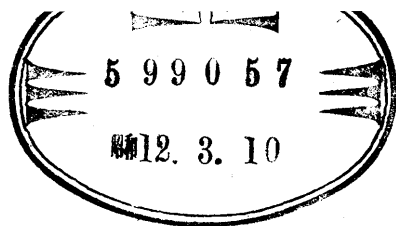
ISSUE DATE:

1937-02-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/138739>

RIGHT:



東洋史研究

第二卷
第三號

昭和十二年二月發行

魏の僧祇戸・佛圖戸

塚 本 善 隆

一、序 説

- 二、平齊戸は平民齊戸の義に非ず
- 三、僧祇戸創設年代考
- 四、僧祇戸の性質と僧祇粟の運用
- 五、僧祇戸・佛圖戸と佛教の律制
- 六、僧祇戸・佛圖戸の普及
- 七、僧祇戸・佛圖戸の功罪影響

有名な大同雲崗の石窟寺院を開鑿した北魏の沙門統曇曜は、高祖孝文帝（高宗に非ず）の許可を得て僧祇戸・佛圖戸を創設し、やがてこれが州鎮に普及し、未曾有の佛教盛昌裏に種々の問題を惹起した。

僧祇戸は、年々六十斛の粟（祇僧粟）を僧曹に納める義務を負ふ特定の戸である。僧曹（長官以下首腦部は僧である）は、これを管理運用し、凶年に賑給し、或は出貸し、また平時には佛教の爲に使用する。佛圖戸（寺戸）は重罪を犯した民と官奴を以つて寺院の掃洒或は寺有地の耕作等の勞役に従事せしめるのである。

一は農本主義の國家に於いて最も緊要な凶年救済、農民生活安定を目的とし、庶民の金融を助ける。他は一種の防犯感化・保護事業となる。共に佛教徒に適しい社會事業・教化運動でもあるが、同時に國家の施設すべき最も重要な社會政策を代行し、以て佛教と國家或は社會とを益々緊密な關係に結ぶ所以となる。佛圖戸は寺に隸屬したらしいが僧祇戸粟は僧曹なる官廳の管理經營であつて、寺に屬するものではない。されどその長官等は僧であり、佛教の名の下に經營せられ、また佛教の爲にも使用されるものである。かくて僧祇戸・佛圖戸は當時の社會に於ける最も重要な資本である耕地と勞働力（一種の農奴と奴隸）とを、佛教々團の所有若しくは管理下にもたらし、寺院僧徒の事業生活の經濟的基礎を強固にする所以となるのであつて、蓋し曇曜創設の本旨も、その後の普及發達も、此に重點があつたのである。

抑々北魏朝廷は平城（山西省大同）に僉都し（三八）恰も佛教頓に盛となつてゐた北支那地方を統治するや、いち早く佛教の感化をうけ、太宗・世祖の朝廷には既に僧徒が出入して説法し、また四月八日の行像（釋迦誕生を祝慶して佛像を輦車にのせて市街を巡行する祭典）には、帝が親しく臨御し散花禮拜する例にまでなつてゐたが、道士寇謙之とこれを推薦した極端な佛教嫌ひの崔浩とを信任した世祖（太武帝）は、やがて峻嚴な廢佛令を實施し（四四）佛寺佛像經卷僧侶等佛教の全てを國土から一掃せしめた。^③然し寇謙之卒し（四四）崔浩誅せられ（四五）世祖崩じ（四五）、やがて佛教復興の詔下り、佛教の反動的興隆期を迎へた。沙門統曇曜はこの機を捉へて上下の興佛熱を指導し北魏文化の代表とも見られる佛教全盛の基礎を確立した手腕家である。^⑤

彼は高宗の和平(四六〇)初年、師賢の後を襲いで佛教復興期第二代の沙門統(梁の僧正に當る)に任ぜられ、顯祖(四六六)を経て高祖の太和(四七七)初年頃まで二十餘年間に、滂沱たる佛教復興の潮に乗つて或は翻譯事業を興し、或は雲崗石窟寺を開く等、かつての排佛朝廷を崇佛興佛の中心と化し、國家と佛教とを不離の關係に結びつけることに成功した。顯祖から高祖治世の前半にわたり、朝廷の實權は、熱心な奉佛者であつた文明太后馮氏(太和十四年崩)に歸し、中書令高允、中書侍郎高閭等政に參與す。高閭に鹿苑佛圖頌の作あり、高允は「雅信佛道、時設齋講、好生惡殺」と傳せられ、顯祖は佛教を好み讓位して僧と共に鹿苑佛圖に住し、高祖も亦佛義に精しく、太后の爲に鷹師曹を廢して報德佛寺を建てしを始め、佛寺行幸造寺法要頻りに行はる。太后の兄馮熙(高祖の時、侍中太師たり)は平城に皇舅寺を建てしを始め、諸州に佛寺を建立すること七十二所、一切經の書寫十六部に及べりと云ふ。

京城内寺。新舊且百所。僧尼二千餘人。四方諸寺六四八。僧尼七七、二五八人。

とは高祖の太和元年(四七七)頃の統計であり(譯老志)、また水經注に平城佛寺の盛況を述べて

京邑帝里。佛法豐盛。神圖妙塔。桀時相望。法輪東茲爲上矣。(卷十)

とあるも高祖の洛陽遷都(太和十八年)前後の狀勢と解して可なるべく、これ曇曜の晩年又は卒後十年前後のことであつて、佛教復興約二十五年間の成績である。^⑥曇曜はかゝる時代に沙門統となり佛教復興の波が最高潮に達した高祖の代に

僧祇戸・佛圖戸の制を設置する許可を得、新興佛教々團を確固なる經濟的基礎の上におかんと志したのであつて、正に佛教復興期の沙門統としての畫龍點睛的事業と云ふべきものである。

「僧祇戸粟及寺戸・徧於州鎮」と云はれる一方、この制施行直後頃の太和元年の「四方諸寺六四七八。僧尼七七、二五八人。」が三十餘年を経て

延昌中(五一二)天下州郡僧尼等(等は寺の誤ならん)。積有一萬三千七百二十七所。徒侶逾衆。

と云ひ、更に魏末には、

累而計之。僧尼大衆二百萬矣。其寺三萬有餘。流弊不歸。一至於此。識者所以歎息也。(釋老志)

と歎息せらる。西晋末に四十二しかなかつた洛陽の佛寺は北魏帝都時代に一躍一千餘寺となり、永寧寺以下の壯麗驚くべき伽藍の櫛比を見るに至つた(洛陽伽藍記)。獨り文獻の上のみならず、太和以後に激增する造像等も亦、佛教の急激な盛況を遺物の上から實證してゐる。この驚異的な佛教々團の膨脹と活況とは、勿論種々の原因も擧げられるが、僧祇戸栗と佛圖戸との經濟的支援と布教上の効果も度外視出來ぬ。また僧祇戸栗・佛圖戸の普及増加は更に政治上社會上にも種々の問題を起し、佛教文化に風靡せられた北魏社會史上の一の興味ある問題たるを失はぬ。されば從來學界にこれに論及せるものも少くないが、頗る簡略或は釋老志の誤謬や宋以來の平齊戸に就いての誤解も明かにされてゐぬ。^⑦以下主として僧祇戸に就いての所見を述べ、併せて佛圖戸にもふれて行くこととする。

二

僧祇戸・佛圖戸の創設を、從來或は高宗の時とし或は顯祖の時とするが、私は敢て高祖の時まで下げる。僧祇戸・佛圖戸に關する資料は、魏書釋老志に出づるものゝ外に極めて少く、從來の異説は、釋老志の記事を精究せずその誤に氣付かざるに依る。釋老志は

和平(四六〇)初。(道人統)師賢卒。曇曜代之。更名沙門統。……曇曜奏。平齊戸及諸民。有能歲輸穀六十斛入

僧曹者。即爲僧祇戸。粟爲僧祇粟。至於儉歲賑給饑民。又請民犯重罪及官奴。以供諸寺掃洒。歲兼營田輸粟。高宗(四五二)並許之。於是僧祇戸粟及寺戸。徧於州鎮矣。……顯祖即位(下略)

と、顯祖即位の記事の前に「高宗並許之」と明記してゐるが、私は之を「高祖並許之」の誤と見るのである。それは先

づ曇曜奏請の劈頭の「平齊戸及諸民」の解釋に出發する。是は僧祇戸の性質並びに創設年代を考へる上に、頗る重要な一句である。

佛教史家として有名な南宋の志磐が、佛祖統紀^{卷卅八}に顯祖の皇興三年^(四六)僧祇戸奏請の事を記し、平齊戸に註して平齊戸。注家未嘗言。或云。平民齊戸之義。僧祇此云大衆。

と「或一説」を紹介して以來、僧祇戸を論ずる人は多く平齊戸を平民の義と解してゐる。なる程、齊民は史記・漢書を始め、魏書にも用例があつて平民の義である。平齊戸を「平民齊戸」即ち平民の義と片づけておけば頗る簡單の様であるが、これでは「平齊戸及諸民」の「及」が意味を失ふ。「諸民」も平民に外ならぬから「平齊戸及」の四字は不要の文字であつて、單に諸民とすればよい筈である。志磐が唯「或云」として附記し、自説としての賛否を明かにしてゐないのは、彼も必ずしも此或説に満足し得なかつたのであらう。

此に私は「平齊戸」「平齊民」が魏書に屢々見ゆることに注意したい。蔣少游傳^(卷九)に

蔣少游。樂安博昌人也。慕容白曜之平東陽。見俘入平城。充平齊戸。後配雲中爲兵。

と云ひ、劉芳傳^{卷五}十五に

慕容白曜。南討青齊。梁鄒降。芳北徙爲平齊民。

と云ひ、房靈賓傳^{卷四}十三に

兄弟俱入國。爲平齊民。雖流漂屯圯。操尙卓然。並卒於平齊。

とある。この平齊戸(民)は平齊郡戸の義である。

顯祖の皇興元年^(四六)、慕容白曜は山東を討伐し、頑強に抵抗した歷城の守將崔道固や、梁鄒^(山東省鄒平縣)の守將劉休賓等を攻撃二年にして降し、彼等降將及びその屬僚等を魏都に送り、また兩城の民を平城方面に強制移徙せしめた。顯祖

は彼等の死を許し、帝都に近い所に平齊郡を置いて居住せしめ道固を太守に任じた。魏書顯祖紀の皇興三年五月の條に「徙青州民於京師」と云ひ、水經注^{卷十}に

(濕水)逕陰館縣故城西。縣故樓煩鄉也。(中略)魏皇興三年^{案皇興近刻訛作天安}齊平。徙其民于縣。立平齊郡。

と云ひ、崔道固傳^{卷十二}に

徙青士^{士北史作土}望共道固守城者、數百家於桑乾。立平齊郡於平城西北新城。以道固爲太守。賜爵臨淄子加寧朔將軍。尋治京城西南二百里。舊陰館之西。

とあるのがこれである。平齊郡には懷寧・歸安の二縣があり、懷寧縣には梁鄒の民を置き劉休賓を縣令とし、歸安縣には歷城の民を置き房崇吉を縣令とした^(魏書四十三)。要するに平齊郡は山東(齊)平定の紀念に、その降將僚屬並に諸民等を徙して、平城に近い濕水上流の地方に設置せられたものである。但し慕容白曜傳に

送道固・休賓及其寮屬於京師。後乃徙二城民望於下館。朝廷置平齊郡懷寧歸安二縣以居之。自餘悉爲奴婢、分賜百官とあつて、山東からの徙民の中には奴婢に落ちた者も少くない。平齊民は奴隸にこそならなかつたが、遠く郷土を離れた土地に縛りつけられて勞働に従事せしめられ、農奴の如き境遇におかれたものと考へられる。彼等は魏軍に最も頑強に抵抗した將卒の一團であり、その太守や縣令はかゝる軍の將であつた。既に歸順せりとは云へ、魏にとつては特に監視を要する一團である。思ふに北魏朝廷は、一面監視に便宜な帝都附近に降將の一團をおくと共に、當時最も苦心してゐた此地方の人口充實農産振興に資せんが爲に、平齊郡を設置したのであらう。

古い文化の山東の地から、戰敗者となつて遠き北方蠻族朝廷監視下に強制移徙せられてゐる平齊民はその心境既に樂めるものではない。而も平齊郡設置の年は、魏が連年の凶作と山東用兵との爲困窮してゐた時であり、この年も亦凶作、顯祖は皇興四年正月「州鎮十一民饑。開倉賑恤。」と詔してゐる。平齊郡はかゝる凶作の時、疲弊の地に設けられ、初年

から饑饉に苦んだ。前引の崔道固傳の文のつゞきに

是時頻歲不登。郡内饑弊。道固雖在任積年撫慰。未能周盡。是以多有怨叛。延興中卒。年五十。

とある。雁門以北に移徙せられてゐることすら非常な苦痛なるべき上に、凶作饑弊に苦しむに至つては、怨叛者の續出も當然である。のみならず、平齊郡下の歸安縣令房崇吉は道固と不和であり不平をもち、朝廷に道固の罪狀を訴へて朝廷が道固の罪をゆるすや、縣令辭任を申出でやがて南奔し僧となつてゐる（魏書四）。こんな有様では平齊郡太守道固の積年の慰撫も奏効せぬのが當然である。畢竟新設平齊郡は、こたゝの斷へぬ不平の一團であり、監視の寛められぬ厄介な郡であつた。恰も沙門統曇曜が平城にあつて與佛愈々盛なる時である。彼が近い所にあるこの統治困難な厄介な平齊郡戸を僧曹監督下に移し、佛教の爲、並に社會救濟事業の爲に奉仕する僧祇戸となさんとし、崇佛の朝廷はこの不平の郡戸を佛教々化の下に委ねるに至つたと解すれば頗る自然である。魏書中に既に平齊戸（民）の用例屢々存し、而も平

齊戸の史實斯の如しとせば、釋老志の平齊民も平齊郡戸と解すべく、平民齊戸の義ではないと云はねばならぬ。

三

私は釋老志の「平齊戸及諸民」を「平齊郡戸及諸民」と解する。若し然らば、平齊郡設置が、既に高宗崩後四年を経てゐる顯祖の皇興三年五月であるから、それ以後にあるべき僧祇戸の設置を高宗が許す筈がない。釋老志の「高宗並許之」の高宗は、顯祖或は高祖の誤でなければならぬ。「通鑑（卷一）」が皇興三年五月平齊郡設置を記した後に「釋老志」の曇曜僧祇戸設置の文を出し、「高宗」を「魏主」なる漠然たる文字に變へてゐるのは、さすがに史家司馬光である。南宋の志磐が僧祇戸設置を皇興三年の條に記し乍ら平齊戸の義を明かにし得なかつたのは、北魏史に精ならずと言はれても致方がない。

扱然らば僧祇戸創設は何時であるか。魏書地形志には平齊郡を記してゐない。これ郡が間もなく廢せられたからである。隋書地理志馬邑郡雲内には、「後魏立平齊郡。尋廢」とある。「尋廢」とは曇曜によつて平齊郡戸が僧祇戸に改編せられたことではなからうか。尤も必ずしも平齊郡廢止即僧祇戸創設と解すべきではなく、平齊郡中の一部、例へば太守崔

道固の慰撫に従はぬ不平の徒若干を先づ僧祇戸にしたものとも考へ得るが、然し僧祇戸と密接な關係ある平齊郡の「尋廢」の年次は一應考慮に入れてよからう。平齊郡廢止年月は明かではないが、太守崔道固は、郡民の不平を「積年慰撫」せりと云ひ、また郡下の歸安縣令房崇吉が道固の罪狀を訴へても、朝廷は道固を處罰しなかつたとある。道固傳に平齊郡太守罷免の記事もなく「延興中(四七六)卒」とあるのは、恐らく彼は平齊郡太守で卒したものであらう。更に道固の子景淵の傳に景淵が平齊郡太守となり郡に卒すとあるのは、恐らく父の郡太守を襲げるものなるべく、道固の死後若干年、景淵卒するまでは、平齊郡が存続してゐたであらう。

一方沙門統曇曜は、高祖の延興二年(四七六)、西域沙門吉迦夜と共に雜寶藏經十三卷付法藏因緣傳六卷等を譯出すと云ひ、更に彼が太和某年まで生存せしことが、高祖が曇曜の次の沙門統を定めた「以僧顯爲沙門統詔」^⑩によつて推知される。而して世宗永平中(五〇八)の尙書令高肇の奏に

謹案故沙門統曇曜。昔承明元年(四七六)。奏涼州軍戸趙荀子等一百家。爲僧祇戸。立課積粟。擬濟饑年。不限道俗。皆以拯施(釋老志)。

とて延興太和の中間の「承明元年云々」の文字あるは注意すべきである。曇曜は「平齊戸及諸民」から僧祇戸を求めた。この「涼州軍戸二百戸」は、平齊郡戸と共に創めて設けられた諸民からの僧祇戸の一例であると見れば、承明元年を以つて、「平齊戸及諸民」を僧祇戸とすることを許された年、即ち僧祇戸創設の年とも解し得るであらう。

また曇曜は僧祇戸と共に罪人を佛圖戸となすことを許された。而して魏書高祖紀に

〔承明元年冬十月〕辛未。輿駕幸建明佛寺。大有罪人。

とある。この年六月に太上皇帝(顯祖)崩す。建明寺行幸は蓋し顯祖の追善の爲であらう。顯祖は佛教を好み、毎に沙門を引見して玄理を談じ佛寺を造立し、殊に讓位の後は北苑に鹿野苑寺を建て、禪僧と共に住した人であるし、當時朝廷の實權を握れる文明皇太后も亦熱心な奉佛の人であつたから、顯祖の爲に佛教的追善興福の事業が盛に行はれたに相違ない。^①釋老志に

承明元年八月。高祖於永寧寺。設太法供。度良家男女、爲僧尼者。百有餘人。帝爲剃髮。施以僧服。令脩道戒。資福於顯祖。是月又詔起建明寺。太和元年二月。幸永寧寺。設齋。赦死罪囚。

とある。即ち顯祖の追善の爲に、朝廷は永寧寺で盛大な法事をやり、多數の僧尼を得度せしめ、また建明寺の建立もやつた。この建明寺に行幸して大に罪人を宥したとか、翌年また永寧寺に行幸して死罪囚を赦したとか云ふものは、曇曜が所謂重罪者を佛圖戸として佛寺の監督下に勞役に從事せしむることを許された事實と一致するものではないかと思ふ。曇曜は僧祇戸設置の目的の第一に、饑年救済資源の蓄積を掲ぐ。北魏は前述の如く天安・皇興の間にも屢凶作に苦んだが、高祖の延興三年も「是歲州鎮十一水旱。相州民饑死者二千八百四十五人」と云ひ翌四年も「是歲州鎮十三大饑」とあつて、翌々年は承明元年である。然らば曇曜は、朝廷が連年の凶年對策に腐心してゐた好機をとらへ、崇佛朝廷に勧めて僧祇戸の許可を得たと解せられよう。

僧祇戸・佛圖戸の如き制度實施には、勢ひ全國佛寺僧尼の調査統計が必要とせられ、或は全國寺僧の調査統計成れる時、かゝる全佛教々團への經濟的施設の必要が認められる。恰も前述の如く承明元年若しくは翌太和元年の統計として「京城内寺百、僧尼二千餘人。四方諸寺六千四百四十八。僧尼七萬七千二百五十八人。」と佛教復興後最初の寺僧統計が文獻に現はれてゐるのも興味深い。

尙私は強ち曇曜畢生の事業の一たる雲崗の石窟寺建造と僧祇戸・佛圖戸を結びつけようとは思はぬ。然し該石窟の主要窟は既に成れるならんも尙續造中であり、その莊嚴を進めつゝありしなるべく、太和年間の行幸も屢々行はれてゐる(註六)。(參照)この事業並にこの大寺維持に必要な費用も漸く老境の曇曜の頭に往來してゐたであらうから、近い平齊郡の内紛などから、これを自ら長官(沙門統)たる僧曹管下に移さんと考へることも、ありそうな事であると思ふ。

要するに僧祇戸創設は、高宗の時とする「釋老志」の説は誤であり、顯祖の皇興三年(四六)から高祖の承明元年(六七)の間にありとすべきである。只私は、魏書釋老志は「高祖並許之」を高宗と誤つたものと解した方が、顯祖の誤と改訂するよりは自然だと思ふし、また種々の歴史事情から推して、崔道固卒後數年を経た高祖の承明元年、即ち顯祖崩じて崇佛の朝廷が盛に追善功德の佛事を營める頃となして、頗る妥當であると考へるのである。

四

僧祇粟は僧曹に納入管理せられる。僧曹は佛教の事を掌る役所であつて、北魏官制の一部である。北魏は中央に監福曹(太和廿一年改昭玄曹)を置き、地方州郡にもその分署とも云ふべき僧曹をおき、佛教に關する事を掌らしめた。中央監福曹の長官が沙門(都)統(昭玄統)であり、その副官が都維那であり、また州郡にも夫々統、維那が任ぜられ、これ等は何れも僧侶であつた。^⑩僧祇戸・佛圖戸が創設せられ、これが州鎮に徧きに至りし時代が、かゝる僧侶を長官以下の首腦部とせる官廳が國家の政治機構中に存し、中央地方の連絡統制が行はれてゐたことに注意すべきである。

中央地方のかゝる僧曹に納入せられる僧祇粟は、畢竟政府に納入せられるのであつて、制度上は官物であつて寺有物でもなく僧徒の收入でもない。然し既にこれを監督運用する者が僧侶である。のみならず僧侶を首腦部とする僧曹は、佛教界の監督取締を掌るには相違ないが、主として朝廷國家の爲に福を修する爲、換言すれば造寺度僧法事講經等、佛教

を弘宣すべき所謂佛教的善根功德を勧め積む爲に置かれてゐるものである。されば僧曹管下の僧祇粟も主として佛教々團の爲に利用せらるゝに至るのは當然である。

僧祇粟は勿論「至於儉歲。賑給饑民」を第一目的としたものである。但し注意すべきは饑民に施與もせられたであらうが、必ずしも施與するのみではなく、利息付きで出貸したものである。永平四年(五一)の詔に

僧祇之粟。本期濟施。儉年出貸。豐則收入。山林僧尼。隨以給施。民有窘弊。亦卽賑給。但主司冒利規取贏息。及其徵責。不計水旱。或償利過本。或翻改券契。侵蠹貧下。莫知紀極。細民嗟毒。歲月滋深。……………

とある。利子付で貸出し得る以上、僧祇粟利殖が講ぜらるゝは必然である。凶作時に、豐作時に返還することにして貸出し、而も付せられた利息が苛重であり、その取立ても頗る苛酷なものもあつた。單に凶年に農民に貸出されたのみならず、平時も窘弊せる民あれば賑給したのであり、更に一般士民の金融にも、また富者にも貸出して、より安全有利な利殖法が講ぜられたのである。右の永平四年の詔は後に、「富有之家、不聽輒貸。脫仍冒濫、依法治罪。」と富者への出貸を禁じ、僧祇粟出貸は貧窮者を先とすべきことを規定してゐるのである。

僧祇粟は凶年に於ける農民への融通、或は一般貧窮者への施與、或は出貸、並に廣く一般士民の金融に運用せられたのみならず、右の詔中に「山林僧尼。隨以給施」とあるによつて、寺院僧徒の用に供し得るものであつたことも明かである。高祖の詔に

可勅諸州。令此夏安居清衆。大州三百人。中州二百人。小州一百人。任其數處講說。皆僧祇粟供備。若粟尠徒寡。不充此數者。可令昭玄量減還聞。(廣弘明集)

とあるが如きは、全國諸州に行はれる衆僧の夏安居の講說費用を僧祇粟を以て支辨せしめた例である。他に資料が傳はらぬが、夏安居以外の佛教々團の諸事業の爲にも僧祇粟が用ひられ、以て佛教興隆が助長せられたであらう。

思ふに各戸年納粟六十斛とは随分重い負擔である。高祖紀の延興三年（四七三即ち僧祇戸創設直前の頃）十月に太上皇帝の親征が行はれんとするに際し、「州郡民十丁取一以充行。戸收租五十石以備軍。」との詔が發せられてゐる。戸收租五十石は軍時非常時の額である。更にまた太和十二年（三八八）、即ち僧祇戸制の後十餘年を経て立案せられた別の凶年對策があることに注意したい。太和十一年帝都附近大饑饉、翌年有司から安民の術二策を上申した。第一州郡の常調九分之二と京都度支歲用之餘とを以て、各官司を立て、豐年に粟を買入れて倉に貯へ、凶年に適當な價で民に供給するものであつて、古く「周禮」にある地官司徒管下の委積の法や漢代の常平倉に類似した餘剩米粟蓄積による凶年對策である。第二は次の如き屯民の制度であつて、僧祇戸制に類似せる點あることに注意したい。

又別立農官。取州郡戸十分之一。以爲屯民。相水陸之宜。斷頃畝之數。以贖贖雜物。市牛科給。令其肆力。一夫之田。歲責六十斛。甄其正課并征戎雜役（中略）帝覽而善之。尋施行焉（食貨志）。

屯民は國家の凶年對策の爲に官から供給せられた耕地と牛とによつて、専ら農耕に従事し年納粟六十斛の責務を負はされてゐる。同じく凶年對策を標榜して許可せられ、年納粟六十斛の義務を負へる僧祇戸も恐らく官若しくは寺から、耕地と牛とが供給せられ、その代り他の課税・征戌・雜役等は免ぜられたものであらう。農官と僧曹と、その所管は異なるが、略々同じ目的を以て新設せられた屯民の制は、思ふに僧祇戸制の影響をうけてゐるのであらう。屯民制は、勿論貧窮救済と云ふ重要な社會政策や國庫充足の爲に、當時北魏が最も力を致してゐた耕地開拓、農民安住、農産振興策の上に立てるものと認められるが（有名な均田制は、この少し前に行はれた）、一面州鎮に普及したと云ふ僧祇粟が、貧窮救済に尙甚だ不十分であつたことを證し、一面に僧祇粟が當時益々盛に興りつゝある佛教々團の爲に使用せられてゐて凶年出賃の貯藏粟が不十分であつたかと推察せしめる。

僧祇戸僧祇粟は、制度上佛教々團の所有に非ず、彼等の耕す土地も必ずしも寺有ではない。然し恐らく一戸の耕作収

入の大半と考へられる僧祇粟が、僧官の監督下に利殖運用せられ、佛教の爲に使用せらるゝとせば、實質に於いては、その土地が無償無税にて佛教々團の管理或は所有に歸した様なものである。況や貴族制、封建制、奴隸制の行はれる社會、而も佛教頗る盛なる時代に於いて、かゝる土地人民が名實共に寺有に歸する機會の多いことは、想像にあまりあることである。要するに僧祇戸は佛教々團に奉仕する一種の農奴の如きものである。僧祇戸の實例として文獻に存するのは、前述の平齊戸と涼州の軍戸との二のみ。この唯二つの例が、被征服者の徙民たる平齊戸と邊境の軍戸と、共に普通民よりも自由を束縛せられ、或は地位が卑く、恐らく現在の生活狀況に不満であつたらうと思はれるものなる點にも僧祇戸の農奴性がうかゞひ得るであらう。

五

抑々農奴的な僧祇戸を管理し、僧祇粟出賃の如き利財に關係し、或は佛圖戸の如き奴隸を驅使することが、佛教々團に許されたことであるか。一應、當時の北魏に行はれてゐた佛典に就いて、この點を考へて見よう。

釋老志に「今行於世」(註③)と云ふ晋末の法顯の「佛國記」には佛滅後、諸國の王、長者、居士が衆僧の爲に寺を立て、田宅、園圃、民戸、牛犢、鐵釜、書錄を供給し、後の王々相傳へて敢て廢する者なく、今に至つて絶えず、衆僧の衣食住に都て缺乏なきことを述べ、「處々皆爾。衆僧常以作功德爲業、及誦經坐禪。……」と傳へてゐるし、經律にも屢々王者富豪の田宅奴隸牛馬等の寄附を彼等の「修功德」として記してゐる。蓋し廢佛後の復興に専心し、略々その事業を成した沙門統臺曜にとつては、かゝる「王々相傳へて廢せざる田園、民戸等の確實な經濟的基礎の上に寺院生活が安定し、僧徒が功德教化の事業と佛道修行との、所謂利他自利二方面の實踐に精進し得る佛教々團」の實現が理想であつたであらう。何れにしても多數の僧衆を擁する佛教々團では、自ら田園等の不動産収入に經濟的基礎をおく寺院が

既に印度に發達し、從つて支那にも普通とせられてゐた。然し注意すべきは、僧侶自らが耕作に従事することは多くの經律が禁止してゐる。此に耕作者たる小作人或は奴隸並に牛馬の類の必要が認められる。佛教々團の規律制度を記した「律」の中で、北魏に多く行はれたものは「十誦律」と「僧祇律」殊に後者である。十誦律^(卷三)に瓶沙王が、作人として五百の賊の命を赦して田宅と共に佛教々團に施したことが見える。曇曜が重罪犯人や官奴を佛圖戶として、寺院の勞役耕作に當らしめたと云ふのと頗る類似したものである。また「十誦律」「僧祇律」その他の諸律にも寺院僧衆の爲に田宅の經營や俗務の處理やその他諸般の勞役に服する「(僧)園民」や「淨人」などがあつたことを記してゐる。僧祇律に「園民者。供養衆僧淨人。」^(九卷)と云ひ、また

僧園民。年々穀麥新熟時。供僧食。云何年々新熟。稻熟時。麥熟時。……各取少分置一處。擬供衆僧。^(卷十)

とあり、また瓶沙王が聚落中にて自ら房舎を營繕せる畢陵伽婆蹉尊者を見て「園民を寄附せん」と申出られ、尊者はこれを固辭したが、更に聚落の人々が來つて、願くは我等を取りて園民とせられんことをと願ひ出でたので、五戒を受けることを條件にして園民とした。五戒をうけた園民の「奉齋修德」によつて殷富となつた聚落が賊の掠奪を被るや、尊者はこれを救つたことが見える^(卷廿)。

印度佛教々團に於ける「僧園民」が領主の庇護下に働いた歐洲中世の農奴的なものであり、北魏僧祇戶制に類似せるものなることは、容易に推察し得よう。

また佛教の諸律には、信徒が自己の求利心から賣買營利をなすことを禁じてゐるが、佛法僧の供養興隆維持の爲、教團全體の爲に行はれる利殖事業が許されて居り、また教團財の餘剩を賣りて利を得ることも無罪とされてゐる。例へば僧祇律には、某時には穀價騰貴すべきことを恐れて買入をなしおきて佛道修行に事缺かぬやうにし、某時果して穀價騰貴せる場合、尙餘剩あらば「餘者難得利。無罪。」となし^(十卷)、また同律を始め諸律に認めてゐる無盡財は、僧團の共

有財を、三寶の爲、僧團の爲に質貸して利殖をはかるものである。今僧祇粟が出貸利殖されても、三寶興隆の爲になされる場合には佛教律制に背かぬのであり、寧ろ獎勵されたことである。況や僧祇戸粟は佛教全體を監督する僧曹の所管にして制度上官物であり、寺や僧の私有に非ざるに於てをや。但し僧祇粟が一寺一僧の利の爲に用ひらるれば、明かに廣く濟施を目的とする僧祇粟本來の趣旨にも違ひ、佛教の律制にも背くことになる。高肇の奏上に

又依内律。僧祇戸不得別屬一寺。而都維那僧頻等。進違成旨。退乖内法。肆意任情……とある。僧祇戸粟制が、内律即ち佛教の律にも違背せぬやうに顧慮されてゐることが知られる。

抑々僧祇は Saṅghika の音譯にして「衆」の義である。衆とは僧尼大衆のことであり、僧尼大衆の共有物を「僧祇物」と稱す。今僧祇粟は僧尼大衆に等しく供せられる粟と云ふ意より名づけられしものなるべく、此名稱の付方にも表面は凶年救済を標榜してゐるが、實際には平時の佛教々團の用にあつる意圖から奏請されしことが察せられる。而して北魏沙門が受持せし律は法顯將來の僧祇律であつたのであるから、恐らく僧祇戸粟の制は僧祇律から導かれてゐるものと考へられる。是私が本節に主として僧祇律を用ひて論述した所以である。

六

「僧祇戸粟及寺戸（佛圖戸）。徧於州鎮矣」釋老志に至りし所以三四を列舉しよう。

①かゝる制度が廢佛の後を承けた佛教復興運動が最高潮に達した時に、熱心な崇佛朝廷によつて採用せられ、その後も朝廷に熱心な崇佛者が續出したこと。文明皇太后・高祖の崇佛は前述の如く、次の世宗は一層の崇佛家であり、肅宗以來實權を握つた靈太后の興佛は、あまりにも有名である。

②僧を首腦部とする官廳が國家官制の中に存し、中央地方の僧官が官の力を用ひて全國佛教を監督し統制し得た時代

に、全國佛教々團の經濟的基礎を確立する所以となる立案である。況や支那佛教界稀に見る事業的手腕家なりし中央沙門都統曇曜が、縱横になし來つた佛教復興事業の結びとして立案したものなれば、州郡の僧官へもこの制度の設置増加が十分に指令勸説せられしなるべく、僧曹収入増加の爲、地方僧官がこれに應ぜしのみならず、僧官管下の僧徒も、僧祇物(僧團共有財)或は寺有財として彼等の用に供せられ得べき米粟や勞動力を得る所以なれば、相和して僧祇戸佛圖戸の増加の運動勸化につとめたであらう。

③佛教の修功德の思想信仰が、僧祇戸等の普及増加の重要な媒介となつたであらう。三世因果、善惡應報の思想は、佛教主要信仰として既に普及してゐた。現世の不滿不幸の生活が過去世に於ける罪惡の應報であるとあきらめられると共にこの宿命は現在に於ける修善累徳によつて打開せられ得る。現世の善根功德は、來世のよりよき生活を約束するものである。而して俗人の修善としては「三寶への施」が特に重ぜられ、殊に自身や近親者を佛教々團に喜捨することが大きな布施功德業として、盛に行はれたものである。^⑭北魏朝廷貴族の佛教興隆も亦この修功德の信仰の現れであり、三寶への「施」の實行である。自由を束縛せられ或は失つてゐる諸民奴婢の中には、僧の監下に三寶に奉仕する身となることを寧ろ喜び望んだ者も少くなくあらう。それは現世の不自由を招致した宿因を打開して、來世のより自由な生涯を約束し樂しみ得る所以と勸説せられ信仰せられたから。太和以來の北魏は上下擧げて佛教時代と云ひて過言でない。その俗人信仰の中心にある修功德、三寶への喜捨の信仰が僧祇戸・佛圖戸の普及増加に重要な媒介をなしたことは想像に難くないであらう。

④最後にかゝる制度が當時の北支那の實狀に適應し國家の政策に順應せるものなることに注意したい。久しい動亂の後、人口稀薄、土地荒廢最も甚しき北支那を統治する北魏の國策の緊要事は、諸民の土著による人口の充實と農業生産の復興であつた。勞働力を總動員して、土地の生産力を出来るだけ利用し、以て國富を充實し國民生活を安定すること

である。頻りに行はれた徙民政策もこの目的の爲である。僧祇戸制度認可直後と考へられる太和元年の勸農桑詔に「相其水陸、務盡地利」と云ひ、農業に怠る者に罰刑を加へよと云ひ、同年の督課農田詔に「無令人有餘力、地有遺利」と云ひ、太和四年五年に罪囚をして速かに耕耘之業に従事せしむる爲、留獄久囚あらしむる勿れと注意せるも、更に數年後に實施された均田制も、此緊要國策であり、恰も僧祇戸採用の前後に北魏朝廷の農業國策への熱意が最も高かりしを見る。而も緊要な農業生産の復興を阻害する水旱は太和元年以來も殆んど連年である。僧祇戸・佛圖戸は農民を土著せしめ、罪人奴婢の勞働力を耕作にむけ、積粟、賑給、出貸によつて諸民生活の安定を求め流離を防ぐ所以となるのであるから、正に北魏の農業國策の一翼たり得るものである。前述せる僧祇戸と殆んど同じ性質目的の屯民制が布かれたのも、僧祇戸の制度が尙不十分であり、かゝる制度の擴充の必要が認められてゐたことを示すものである。と同時に、「擬濟饑年、不限道俗、皆以拯施。」と云ふ制度は久しく荒廢に苦しんでゐる北支那農村社會も少くとも初めは歓迎した所であつたらう。

七

僧祇戸・佛圖戸の普及に伴ふ功罪が對蹠的に考へられる。凶年賑給・貧民救濟・庶民金融・土著農業勞働者の増加、耕作地並に勞働力の増加と統御、及び佛教による不平分子・犯罪者の教化保護と犯罪豫防等に功あり、延いて北魏が苦心した北支那產業殊に農産振興政策を助けたことはその對外的な功に數へられる。沙門統建築のこの制度が、内佛教の弘通興隆に寄與せる點は更に大である。

先にある聚落民が受持五戒を條件として園民になることを許されたと云ふ僧祇律の一例を示しておいたが、佛寺に奉仕する園民淨人は、佛教信者なること、隨つて在家の戒律たる五戒を受持すべきものとせられたのである。僧祇戸が如

何なる佛教上の制約をうけたかは知る由もないが、既に中央地方の沙門統等に統監されるものであるから、少くなくとも佛教に反対せざることを要求されたであらうし、佛教々化をうける機會も多かりしなるべく、恐らく、律の園民の如く五戒の授與などが行はれたものと想像される。

重罪犯人が佛教のお蔭で死刑を免れて佛圖戸になる。奴婢が佛寺に奉仕して來世の自由に希望をかける。佛圖戸も佛教信仰に入る機會が多かつたであらう。太和十年^(四八)、僧尼の行麤なる者を悉く罷めて齊民に還さしめしに還俗僧尼一三二七人と云ひ、延昌二年^(五一)、靈太后は奴婢の出家を嚴禁し、違犯者關係者を嚴罰し、地方官吏にまでその責任を及ぼすことにしてゐる。當時奴婢の出家が多かつた爲であり、その中に佛圖戸出身者が想像される。奴婢出家は佛教の律にも禁じてゐる。而もかく多かりしを見れば、諸民出身の僧祇戸からの出家者も少くなかつたであらう。

僧祇戸・佛圖戸が佛教に導入せられるのみならず、これが媒介となつて信者を増加する。僧祇粟が僧の手から賑給せられ出貸される。この施與融通の恩恵から自ら發生して行く恩義的主従的觀念や關係は、また被施者被融資者を佛教に誘ふ。彼等も佛教々化を被る機會が多かつたであらう。物の施給が宗教傳道の頗る有力な方便となる事は常に見る所である。後漢末の張陵を天師と仰ぐ道教では、各地に義舍を作り食肉を置き、無料で行人の使用供給に任せて信徒を誘引した。北魏寇謙之の天師道は佛教覆滅の源となつた。その後をうけて佛教復興の大任を着々遂行し來つた沙門統曇曜の僧祇粟が、會ての道教の義舍事業に一脈相通するのも興味深い。

僧祇戸・佛圖戸によつて佛寺經濟力が堅實豊富になれば佛寺の僧尼収容力が増大し、僧尼希望者も増加する。僧祇戸創設直後頃の四方諸寺六千四百七十八僧尼七萬七千二百五十八^(一寺平均)は、魏末に寺三萬餘僧尼二百萬^(一寺平均)と云ふ。寺の増加も驚くべきであるが一寺僧尼の平均率の著しい増加に注意すべきである。是佛寺經濟力の増大を裏書する所以ではないか。僧祇戸・佛圖戸が佛教々團の財力を豊富にし、内には僧尼を増加し、外には信者を増加し、信者の

増加が愈々教團を富ます。幾多の農奴・奴婢・僧衆・信者を傘下に集め佛教々團はやがて王侯貴族と同じ位置を占め、此地位と財力とが益々農奴・奴婢・僧衆・信者を集中して佛教を益々盛ならしめる。北魏佛教空前の昌榮と僧祇戸・佛圖戸の普及との離すべからざる關係推して知るべきである。勿論これのみを佛教昌榮の原因とするものではないが。

僧祇戸・佛圖戸は、内佛教の弘通發展に資し外社會國家に貢獻せし所あると共に、弊害の伴隨も少くなかつた。州鎮に普及せる僧祇戸粟を隸屬管理利殖するに至れば僧曹の職權は頗る増大すべく、僧曹首腦部は僧の占むる所である。僧曹僧官の手に莫大な勞働力と財物とが歸することは、他の諸官廳との均衡を破り、諸官吏の嫉妬不平を招きはせぬか。太和時代以來儒教文化の伸張が著しい。而して前述の如く太和十二年以來、周・漢の制に摸した餘剩金による米粟蓄積や屯民の制を別に施行して凶年賑給の備を整へた。僧と俗と監督者を異にせる略々同じ目的を掲げたこの兩制度が同じ政治組織内に對立した場合、反目相尅が豫想される。元來興佛時代に崇佛朝廷に認可され佛教的興福事業を豫想せる僧祇粟は、自ら平素佛寺僧徒の爲に支出され勝ちとなり、第一に標榜してゐた凶年非常時には、賑給に應ずべき蓄積米粟が不十分であつたらしいし、更に僧の手を離れた別の施設が整備せられた上は、恐らく僧祇粟設置の本來の意圖であつたと思はれる佛教々團の維持興隆の資金に充當されることが一層多くなつたであらう。此に官物・僧俗共用財の寺有化僧有化の傾向が助長さるべく、更にこれが管理の任にある僧官に人を得ざれば酷使苛斂が起り私利を貪る弊害が生ずる。尙書令高肇は僧祇戸となりし涼州軍戸が苛斂に苦しみ自殺者五十餘を出してゐる慘狀を擧げて都維那僧暹僧頻等の非違を糾彈し、世宗は僧祇粟出賃に高利を附し、徵收に水旱の事情を考慮せず、償利が本を過ぎたり契約書改變が行はれたりして細民を苦しめてゐることを指摘して、以後は僧官のみの管理に委ねず、刺史をして監括を加へしめ、尙書は僧祇粟の所在地を州別に調査し、その元數、出入の利息、賑給の多少、貸償歲月、現在未收等を記録にして出納を明かにし收利過本のものや初券を翻改せるものは律によつて免じて復た徵責するなからしめ、後出賃の場合は先づ貧窮者に

對してなすべく、富者への融通は禁じ、冒濫あれば法を以て治罪することにした(五一)。僧曹僧官の權限抑制であると共に僧官の私利取締りである。然し國家から任命される僧統・維那が佛教界に有力地位を占めるは云ふ迄もなく、僧祇戸粟の管理運用權を握れば、その實力は社會的にも頗る大とならう。維那僧還は高聲から非違を摘發され乍ら特にゆるされてゐるのみならず、やがて沙門統に榮進してゐる。これ固より朝廷の崇佛に由來するとは云へ、また以て僧官在任者の實力を推察せしめる¹⁶。此俗界貴族にも准すべき少數權力僧等の下に、夥しい僧尼大衆や農奴・奴隸が隸屬し管轄され、また元來僧俗の共用財或は全僧衆の共有財とさるべきものゝ普遍性流動性が遮斷せられて、私利私用に供せらるゝに至つては、佛教々團にも國家にも重大な危險が胎む。

正光已後。天下多虞。工役尤甚。於是所在編民相與入道。假慕沙門實避調役。猥濫之極。自中國之有佛法未之有也。略而計之僧尼大衆二百萬矣。其寺三萬有餘。流弊不歸一至於此。識者所以歎息也。(釋老志)

と云ふ中に學力德行共に僧に適はしからざる夥しい僧衆が推察される。大きな財力權力をもつ少數僧侶の享奢權勢と、これに統括驅使される無智なる僧衆の卑俗とは、共に佛教々團の墮落を導くのみならず、かゝる著しい階級性の對立は、自治共議の制をとり平等を原則とする僧團の本性に反する。大藏經中の羅什譯仁王般若經なるものは、恐らく北朝末の偽撰であるが隋代盛に行はれたものである。此經に

若我弟子比丘比丘尼。立籍爲官所使。都非我弟子。是兵奴法。立統官、攝僧典、主僧籍。大小僧統共相攝縛。如獄囚法兵奴之法。當爾之時佛法不久。下卷

とあるが如きは、心ある僧の僧官特權僧への抗議警告と見られる。

元來僧祇戸・佛圖戸になれる者には、現在の環境に不満をもち國家に不平を懷ける者が少くない。僧祇戸の例として出づる平齊郡戸と云ひ涼州軍戸と云ひ、共に武器を與へて容易に兵化される。奴隸や重罪犯人から成れる佛圖戸も亦然

り。愚昧なる僧衆と信者も亦然り。涼州は魏書地形志によれば縣二〇、戶三二七二、一縣の戶口最少七五戶最多三七二戸とある。涼州軍戸二百家が僧祇戸となれりとせば、優に一縣全部の戸數に當り、その僧祇粟收入も莫大乍ら、之が匪賊化すれば相當なものである。匪賊は支那社會に絶えざる所、況や蠻族が漢族を抑壓支配し、一部族が多數異族を強壓してゐる時代に於てをや。僧祇戸・佛圖戸に政府に好感をもたぬ者が多い場合、彼等並に僧尼大衆が少數特權僧侶に酷使され反感を懷ける時、何等かの使喚と指導があれば容易に匪賊化する。地方豪族が有力な僧徒と結び、僧祇戸・佛圖戸や愚昧な僧徒並に信徒大衆が之に雷同附隨すれば相當強大な宗教匪が成立する。北魏には佛教匪が少くなかつた。魏書に見ゆるものゝみでも太和以後に太和五年^(四八)の法秀の反、太和十四年^(五〇)司馬惠御の反、永平二年^(五〇)劉惠汪の反、同三年劉光秀の反、延昌三年^(五一)劉僧紹の反、同四年法慶の反^(五一)大乘賊、熙平中^(五一六)法權の反等何れも沙門や佛菩薩の名をかる佛教匪であり、大乘賊殘黨の如きは熙平二年^(五一)にも聚結反亂してゐる。かゝる佛教匪に僧祇戸・佛圖戸の關係ありし明證を得ずと雖も、直接間接の連關が想像されるではないか。僧祇戸・佛圖戸は佛教々化によつてその不平不満を緩和した功もあつたらうが、同時にかゝる危險も警戒せねばならなかつたと思はれるのである。^⑬

四七〇年代に創設せられた僧祇戸粟・佛圖戸は、五一〇年頃には既に各地に普及し、一面佛教々團に對しても、國家に對しても、種々の弊害と危險とを醸成してゐた。かゝる制度が何時まで存続し如何に改廢せられたか明でない。北魏以後に僧祇戸・佛圖戸の文獻を知らない。隋文帝は寧ろ儒教以上に佛教を重んじ、恰も我が國分寺の如く全國諸州に舍利塔を置いて地方民心歸趨の中心となし、大いに佛事を興し沙門を優遇し、佛教に依る治國を意圖したかと見られ、また北魏の僧官制も略々存続してゐるが、僧祇戸・佛圖戸の如き僧官を中心とせる社會施設社會事業の文獻を見ない。一面全國農村(社)に義倉を設置し米粟を蓄積して凶年に備ふる制度を強調してゐる。思ふに僧祇戸・佛圖戸制は、北魏末以來の國家の分裂興亡、儒・佛・道の衝突の激化、周武帝の廢佛等を経た間に改廢消滅してゐたのかも知れぬ。然し隋の

義倉、下つては遼金の二税戸（佛寺に賜へる戸にして税を二分し一半を官に一半を寺に輸す）、或は日本の大寶令に於ける「凡神戶調庸及田租、並充造神宮及供神調度。其稅者一准義倉。」と云ふ制度も、北魏僧祇戸に比較攻究せられてよいものであらう。更にまた、北魏太和以後隋・唐・宋時代の主として北支那に於ける呂義呂社等の信仰を紐帶とせる團體の發達或は寺院に於ける無盡藏・長生庫の質貸事業や、莊田・客戸・奴婢の増加發達等も、僧祇戸・佛圖戶と連關の上に考へてよかるべく、官物・僧俗共用財・僧衆共用財が經濟社會や寺院の發展に伴ひ、個々の寺院或は權力僧の私用私營への傾向をとつて發展するのも自然の勢であらう。⁽¹⁷⁾

以上僧祇戸粟に就いて從來よりも多少明かになし得たとは思ふが、尙文獻の不足による推論に隔靴搔痒の感を免れぬ。大方の高教を得れば幸である。

註

（昭和一二、一、一、於湯崎脱稿）

①北支那の佛教は佛圖澄（三四八年寂）道安（三八五年寂）等によつて頓に普及し、鳩摩羅什（四〇一年長安に入る）を迎へて一層勃興、北魏の威令が甘肅・陝西の佛教中心地に延びるに及んで、西域佛徒の來る者も多し。

②魏書釋老志。「世祖初即位。亦邇太祖太宗之業。每引高德沙門與共談論。於四月八日、與諸佛像行於廣衢。帝親御門樓臨觀、散花以致禮敬。……惠始致京都。……世祖甚重之。每加禮敬。」

行像の祝典の西域印度に盛なりしこと法顯傳に見え、法顯傳が北魏に行はれたことは釋老志に見ゆ。北魏洛陽時代に行像の祝典益々盛なり。洛陽伽藍記景明寺の條に

時世好崇福。四月七日京師諸像皆來此寺。尙書祠部曹錄象。凡有一千餘軀。至八日以次入宣陽門、向闔闔宮前。受皇帝散花。

於是金花映日、寶蓋浮雲。幡幢若林香煙似霧。梵樂法音聒動天地。百戲騰騰所在駢比。名僧德衆負錫爲群。信徒法侶持花成數。車騎填咽繁衍相傾。時有西域胡沙門。見此唱言佛國。

と云ふが如きその一例なり。

③詔曰、「昔後漢荒君信惑邪僞、妄假睡夢事胡妖鬼以亂六常。（中略）自今以後敢有事胡神及造形像泥人銅人者門誅。（中略）蓋大姦之魁

也。有非常之人。然後能行非常之事。非朕孰能去此歷代之偽物。有司宣告征鎮諸軍刺使、諸有佛圖形像及胡經盡皆擊破焚燒。沙門無少長悉抗之。」これ所謂三武法難の第一にして、北周武帝の廢佛は佛寺等を諸臣に賜與し、唐武帝の廢佛は尙若干の寺と僧を存せしめしが、北魏のは「非常の人に非ざれば孰か能くせんや」の意氣を以て誅殺擊破焚燒、佛教の形の一切を破毀一掃せり。

④高宗紀に「(興安元年十二月)初復佛法」とあり、その詔は釋老志に見ゆ。略に曰く

高宗踐極下詔曰「釋迦如來功濟大千、惠流塵境。(中略)我國家常所尊事也。……諸州郡縣於衆居之所。各聽建佛圖一區。任其財用不制會限。(中略)聽其出家。率大州五十、小州四十人。其郡遙遠臺者十人(下略)」。天下承風、朝下及夕。任時所毀圖寺仍還修矣。佛像經論皆復得顯。

⑤曇曜傳は續高僧傳一、廣弘明集二、等に出づるも生所卒年を詳にせず。彼が次官もおかずに切りまはせし手腕家なりしことは、高祖の詔によつても知らる。註⑩參照。

⑥曇曜沙門統時代の復興佛教の一斑を示すに左の如し。

和平三年(四六二)曇曜淨土三昧經等を譯す(歷代三寶記三、開元釋教錄六) 皇興元年(四六七)永寧寺を起て七級佛圖を構ふ、高三百餘尺基架博敞天下第一なり。又天宮寺に釋迦立像高四十三尺を造る、赤金十萬斤黃金六百斤を用ふ(釋老志)。 皇興中(四六七—四七一)三級石佛圖高十丈を構ふ、京華の壯觀たり(釋老志) 延興元年(四七一)顯祖讓位北苑の西山に鹿野佛圖を建つ。

延興二年(四七二)詔曰、比丘不在寺舍、遊涉村落。令民間五五相保、不得容止。若爲三寶巡民教化者。在外齋州鎮維那文移。在臺者都維等印牒。然後聽行。 又詔曰、内外之人。興建福業。造立圖寺。高敞顯博。亦足以輝隆至教矣。然無知之徒各相高尚。貧富相競費竭財產。務存高廣。……自今一切斷之。

又詔曰、濟州東平郡靈像發輝變成金銅色。殊常之事絕於往古。熙隆妙法理在當今。有司與沙門統曇曜令州送像達都。使道俗咸親實相之容。普告天下皆使聞知(釋老志)。これ等高祖初年の詔に沙門勸化の盛を祭すべく、復興佛教此に最高潮に達し、その弊も少なからざるを見る。此間曇曜は「高者七十尺次六十尺。彫飾奇緯冠於一世」と云はれる雲崗の石窟の佛像を造立せり。尙帝紀のみにより顯祖高祖の佛寺行幸例を抄出するも左の如し。 皇興元年幸武州山石窟寺。同四年幸鹿野苑石窟寺(顯祖紀)。承明元年幸建明佛寺大宥罪人。太和三年幸方山起思遠佛寺。同四年正月罷畜鷹鷄之所、以其地爲報德佛寺。同八月幸武州山石窟寺。同六年幸武州山石窟寺、賜貧老者衣服。同七年幸武州山石窟寺。同八年幸方山石窟寺。

(高祖紀)

⑦ 稻葉君山氏「經濟史より見たる支那佛教徒の地位」支那社會史研究所收。大村西崖氏「支那美術史彫塑篇」。松本文三郎氏「大同の佛像」支那佛教遺物所收。高雄義堅氏「北魏に於ける佛教々團の發達に就て」龍谷大學論叢二九七。山崎宏氏「隋唐時代に於ける義色及び法社に就て」史潮三ノ二等。尙印刷中に最近の史學年報(二ノ三)に蒙思明氏の「元魏の階級制度」に「僧祇戸」なる一節のあるを知る。されどこれも亦頗る簡略なるものなり。

⑧ 拒守二年。崔道固及兗州刺史梁鄒守將劉休賓。並面縛而降。白曜皆釋而禮之。送道固休賓及其寮屬於京師。後乃徙二城民望於下館朝廷置平齊郡懷寧歸安二縣以居之。自餘悉爲奴婢分賜百官。(魏書五〇慕容白曜傳)

⑨ 梁僧祐の出三藏記集二に「雜寶藏經十三卷闕 付法藏因緣經六卷闕 方便心論二卷闕 右三部凡二十一卷。宋明帝時。西域三藏吉迦夜。於北國以僞延興二年。共僧正釋曇曜譯出。劉孝標筆受。此三經並未至京都」と云ひ、隋の歷代三寶紀九には「雜寶藏經十三卷 付法藏因緣傳六卷 稱揚諸佛功德經三卷 大方廣菩薩十地經一卷 方便心論三卷 右五部合二十五卷 宋明帝世。西域沙門吉迦夜魏言何事。延興二年。爲沙門統釋曇曜。於北臺重譯。劉孝標筆受。見道慧宋齊錄」とあり。

⑩ 門下近得錄公等表。知欲早定沙門都統。(中略)今以思遠寺主法師僧顯。(中略)可勅令爲沙門都統。又副儀貳事。縉素攸同。頃因曜統獨濟。遂廢茲任。今欲毗德贊善。固須其人。皇舅寺法師僧義……用膺副翼可都維那。(廣弘明集二七所收高祖の詔)

思遠寺は釋老志の太和元年三月永寧寺行幸の記事の後に「又於三方山太祖營壘之處建思遠寺。」とあるもの。皇舅寺は孝文帝時代の侍中太師馮熙(文明太後の兄)の所建(水經注一三)。共に平城の寺なれば、これ等の寺主が都僧統都維那に任ぜられしは太和元年以後洛陽遷都(太和十八年)以前のことに察せらる。

⑪ 魏書節義列傳七十五に

王玄威恒農北陝人也。顯祖崩。玄威立草廬於州城門外。衰裳蔬粥哭踊無時。(中略)及至百日、乃自竭家財、設四百人齋會。忌日又設百僧供。大除日、詔送白袴褶一具與玄威。釋服下州、令表異焉。

これ民間に於ける顯祖追善の業が旌表せられし一例なり。

⑫ 蘇老志に、「先是立監福曹太和二十一年(四九七)改昭元曹。備具官屬。以斷僧務。」

とあり、また續高僧傳卷八の法上傳に法上が僧統となりしことを述べて、

故魏齊二代歷爲統師。昭玄一書純掌僧錄。令史員置五十許人。所部僧尼二百餘萬。而上綱領將四十年。……

といひ、また隋書百官志の

昭玄寺掌諸佛教。置大統一人、統一人、都維那三人。亦置功曹主簿員。以管諸州縣沙門曹。

とある制度も、大體に於いて北魏以來の制度を繼承しゐるものと見らる。

⑬沙門法顯。慨律藏不具。自長安遊天竺。法顯所巡諸國傳記之。今行於世。其所得律通譯未能盡正。至江南更與天竺禪師(佛陀)跋陀羅辯定之。謂之僧祇律。大備于前。爲今沙門所持受。(釋老志)

⑭世宗の時瀛州刺史たりし裴植の傳に(魏書七一)

植在瀛州也、其母踰七十、以身爲婢、自施三寶。布衣麻非、手執箕箒於沙門寺洒掃。植弟瑜、榮、衍並亦奴僕之服、泣涕而從、有感道俗。諸子各以布帛數百、購免其母。於是出家爲比丘尼。

と。佛祖統紀はこのことを延昌四年(五一五)の條に出す。また大英博物館藏の敦煌寫經、般若波羅密經(54238)跋に

大代建明二年四月十五日、佛弟子元榮、居末劫生死是累、離鄉已久歸慕常心、是以身及妻子、奴婢六畜悉用爲比沙門天王布施三寶、以銀錢千文贖、錢一千文贖身及妻子、一千文贖奴婢、一千文贖六畜、入法之錢即用造經、願天王成佛、弟子家眷奴婢六畜滋益長命及至菩提悉蒙還闕、所願如是。(Giles, Dated Chinese manuscripts in the Stein Collection. Bulletin of the School of Oriental Studies, London Institution Vol-VII Part4)

とあり、また右等と同時代の梁武帝が屢々佛寺に捨身供養せしことは有名なることなり。

⑮莊帝(五二八—五二九)が官爵を賣れる時、

輸粟八千石、賞散侯。……三千石散男。織人輸七百石賞一大階。授以賞官。白民輸五百石。聽依第出身。……諸沙門有輸粟四千石入京倉者。授本州統。若無本州者授大州郡。若不入京倉。入州郡倉者。三千石畿郡郡統依州格。若輸五百石入京倉者。授本郡維那。其無本郡者授以外郡。粟入外州郡倉七百石者。京倉三百石者。授維那。(魏書食貨志)

とある州統等の相場や、北齊書の

道人(道)研爲濟州沙門統。資產巨富。在郡多有出息。常得郡縣爲徵。(卷四十六蘇瓊傳)

の記事の如きも、僧官の經濟的社會的地位を想はしむ。

⑯續高僧傳三十三魏榮陽沙門超達傳に附せる僧明の傳に、「僧明道人。爲北臺石窟寺主。魏氏之王天下也。每疑沙門爲賊。收數百僧互繫縛之。僧明爲魁首。以繩急纏從頭至足。(下略)」とあり。この事の年代明ならざるも洛陽遷都後のことの如し。北臺石窟寺は沙門統曇曜が住せし所、恐く所屬の佛圖戸や關係深き僧祇戸も少なからざりしなるべし、數百の僧衆あり、多數の信徒あり、乃至佛圖戸・僧祇戸に關係深き石窟寺の如きは、洛陽遷都後にありては頗る危険な一團たるを免れず、寺主へのかゝる容疑の加へられし所に注意すべし。

また高祖時代の盧淵の奏に、「又聞流言。關右之民。自比年以來。競設齋會。假稱豪貴。以相扇惑顯然於衆坐之中。以謗朝廷。無上之心、莫此爲甚。愚謂宜速懲絕戮其魁帥。不爾懼成黃巾赤眉之禍。」(魏書四七)と云ひ、熙平二年の詔に「州鎮城隍各令嚴固齋會聚集、糾執妖誼。……」(魏書九)とあり。佛教の興隆を勸め乍ら、一面民間に於ける宗教的會合に頗る奇險性を感じて嚴戒を必要とした情勢に注意すべし。

⑰高雄義堅氏前掲論文、山崎宏氏前掲論文(註⑦)及び「隋の高祖文帝の佛教治國策」、道端良秀氏「無盡の研究」等參照。